

1962年から始まった第2バチカン公会議

ここでは、万国宗教会議を「現代の宗教間対話の先駆け」として位置づけることを狙いとしている。現代における「宗教間対話」といえば、1962年から始まる第2バチカン公会議の「宣言」(後述)が有名である。だが、それより70年前に、万国宗教会議が開かれていたのだ。

万国宗教会議の開会式会場には、5千人以上の聴衆者が詰めかけた。大会委員長をつとめたのは、プレスヒテリアン教会の牧師であるジョン・パロースであった。開会式当日、各宗教の正装に身をつんだ約200人の代表が会場正面の壇上に並ぶなか、パロースは次のような情熱あふれる歓迎の挨拶を述べている。

「諸君、今回の大会を、そこらにあふれた講演会と混同しないで下さい。これこそ、実に歴史上特筆すべき出来事です。風光明媚な日本から、地味豊かな中国から、水色清冽なインドから、イランから、シャムから、地震国サンチ島から、学術のメッカたるドイツから、文明の中心たるフランスから、われらの母国たる英国から、わが愛する合衆国から、無慮一六宗の代表者が来たり会し、真理の研

究に従事するとは、これこそ空前の出来事といえないことがありまじょうか。始めあるは易く、終わりあるは難し」と申します。われらは、幸いに四海同胞兄弟たる諸君の賛助を得て、ここにこの

に、欧米においても、仏教をまがりなりにも認めた画期的な宣言が、「キリスト教・儒教などの宗教が知られるようになったのである。の態度についての宣言」で

賢慮と愛をもって、他の諸宗教の信奉者との話し合いと協力を通して、かれらのもとに見出される精神的・道徳的富および社会的・文化的価値を認め、保存し、さらに促進するよう勧告する」と述べられている。

プロテスタント諸教会の動向についてもふれておきたい。宣教をめぐる諸問題について話しあうため、1910年にエディンバラ「世界宣教会議」が開かれた。これが1921年に「国際宣教協議会」として組織され、さらに、1961年に「世界教会協議会」(WCC)に統合された。

1910年に会議が開かれたときの問題意識は、「宗教間対話」というよりもエキメニスム——歴史のなかで多くの教派に分裂したキリスト教をもう一度ひとつにしよという動き——にあった。だが、第2バチカン公会議の影響もあって、1968年の第4回世界教会協議会において、宗教間対話への意志が明確にされたのである。

さらに、ごく最近の動きとしては、昨年「宗教間・文化間対話のための国際センター」が、サウジアラビア、スペイン、オーストラリアの三政府によって設立され、今年1月から活動を始めた。設

「万国宗教会議の精神は、現代の宗教間対話の底に流れる精神を先取りしている」とみなすことは許されるであろう。筆者としては、種々の宗教間対話の参加者の心意気を重視したい。

シカゴ万国宗教会議120年に思う

星川 啓慈

大正大学文学部教授

~ 3 ~

現代の宗教間対話の先駆け

大会を開くことができた。諸君、ねがわくは、一宗一派の偏見を捨て、互いに相敬愛し、真理の生命をして健康ならしめて下さい。

この万国宗教会議から70年後の第2バチカン公会議の目的は、カトリック教会を「現代化」することにある。そして、その「現代化」の一つが、他宗教にたい

その宣言には「カトリック教会は、これらの諸宗教を「現代化」することにある。そして、その「現代化」の一つが、他宗教にたい

「世界宣教会議」が開かれた。これが1921年に「国際宣教協議会」として組織され、さらに、1961年に「世界教会協議会」(WCC)に統合された。

1910年に会議が開かれたときの問題意識は、「宗教間対話」というよりもエキメニスム——歴史のなかで多くの教派に分裂したキ

名を連ねている。サウジアラビアのサウド・ファイサル外相は「世界平和は世界主要宗教の平和なくしては成り立たない」と述べた。今後、同センターの活動が世界平和実現に向けて大きな貢献をしてくれることと期待がかかる。

以上のように、万国宗教会議から120年を経た現在から、宗教間対話の歴史(他にも言及すべき動きはありますが)を鳥瞰してみると、万国宗教会議の相対は、当時のものとは異なっているであろう。つまり、

「万国宗教会議の精神は、現代の宗教間対話の底に流れる精神を先取りしている」とみなすことは許されるであろう。筆者としては、種々の宗教間対話の参加者の心意気を重視したい。



文明の中心たるフランスから、われらの母国たる英国から、わが愛する合衆国から、無慮一六宗の代表者が来たり会し、真理の研

究に従事するとは、これこそ空前の出来事といえないことがありまじょうか。始めあるは易く、終わりあるは難し」と申します。われらは、幸いに四海同胞兄弟たる諸君の賛助を得て、ここにこの

に、欧米においても、仏教をまがりなりにも認めた画期的な宣言が、「キリスト教・儒教などの宗教が知られるようになったのである。の態度についての宣言」で

賢慮と愛をもって、他の諸宗教の信奉者との話し合いと協力を通して、かれらのもとに見出される精神的・道徳的富および社会的・文化的価値を認め、保存し、さらに促進するよう勧告する」と述べられている。

プロテスタント諸教会の動向についてもふれておきたい。宣教をめぐる諸問題について話しあうため、1910年にエディンバラ「世界宣教会議」が開かれた。これが1921年に「国際宣教協議会」として組織され、さらに、1961年に「世界教会協議会」(WCC)に統合された。

1910年に会議が開かれたときの問題意識は、「宗教間対話」というよりもエキメニスム——歴史のなかで多くの教派に分裂したキ

名を連ねている。サウジアラビアのサウド・ファイサル外相は「世界平和は世界主要宗教の平和なくしては成り立たない」と述べた。今後、同センターの活動が世界平和実現に向けて大きな貢献をしてくれることと期待がかかる。

以上のように、万国宗教会議から120年を経た現在から、宗教間対話の歴史(他にも言及すべき動きはありますが)を鳥瞰してみると、万国宗教会議の相対は、当時のものとは異なっているであろう。つまり、

「万国宗教会議の精神は、現代の宗教間対話の底に流れる精神を先取りしている」とみなすことは許されるであろう。筆者としては、種々の宗教間対話の参加者の心意気を重視したい。